

平成 21 年 6 月 18 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520293

研究課題名（和文） 中国東南方言資料による「文法化」に関する記述的研究

研究課題名（英文） Grammaticalization in Southeast Chinese

研究代表者

佐々木 勲人（SASAKI YOSHIHITO）

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：40250998

研究成果の概要：

それぞれがヨーロッパの一言語に匹敵する規模と個性を備えた中国東南地域の諸方言について、詳細な記述的研究を行うことによって、その文法体系を明らかにした。また、その過程において明らかとなった、受動文、使役文、処置文、受益文などヴォイスに関わる様々な言語現象に関して、「文法化」の観点から分析を行った。これによって、北京語のみを研究対象とする従来の研究が看過してきた新たな言語事実を発掘し、中国語における「文法化」のプロセスについて新たな知見を得た。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総 計	2,400,000	480,000	2,880,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：中国語学

1. 研究開始当初の背景

莫大な使用人口を抱える中国語は、広大な国土の各地にさまざまな方言を形成している。それらは一般に北方方言と東南方言の二つに大別されるが、両者の性質は大きく異なっている。

“官話”として知られる北方方言は、国土の約3分の2を占める広い地域で使用されているにもかかわらず、比較的均一性が高いことで知られる。“普通话”と呼ばれる現在の標準語も北方方言を基礎方言としている。これに対して、東南地域に集中する東南方

言には、北方方言のような均一性は乏しいといわれる。一般に、呉方言、湘方言、贛方言、客家方言、粵方言、閩方言の6つが東南方言の下位方言として挙げられるが、それぞれがヨーロッパの一言語に匹敵する規模と個性を備えている。

文法研究の分野において「中国語」と言ったとき、通常それは北方方言を基礎方言とする標準語を意味する。北方方言の代表である北京語が「中国語」と同義に扱われているといっても過言ではなく、東南方言の文法に関する研究は必ずしも十分に行わ

れてこなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中国東南地域のさまざまな方言の文法を詳細に記述・分析することによって、北京語のみを研究の中心とする従来の文法研究が看過してきた新たな言語事実を発掘し、そこに見られる「文法化」のプロセスを解明することにある。

「文法化」とは、もともと実質的内容を表していた言語単位が、時間の経緯にしたがって機能語としての文法的役割を担うようになる歴史的变化と定義される。このような定義に従えば、共時的なデータのみを扱って「文法化」の問題を論じることは許されないことになる。だが、そもそも中国各地の方言を研究対象とした場合、歴史的に遡って口語資料を入手することは不可能に近い。しかし、だからと言って方言文法が「文法化」の問題を論じられないということにはならないであろう。

東南地域の複数の方言資料を総合的に分析するならば、共時的な資料に基づいて文法化のプロセスに合理的な説明を与えることは十分に可能であると考えられる。一般に、歴史的なアプローチのみが許されると思われがちな「文法化」の現象に対して、東南方言の共時的な資料に基づいて、そのプロセスを解明していくことが本研究の目的である。

3. 研究の方法

はじめに、「文法化」に関する言語データの収集を行った。拙著『東南方言比較文法研究』（好文出版、2002 年）で提示した以下の文法項目について、各地の方言を詳細に記述し、その文法体系を明らかにした。

1. 動詞述語文
2. 形容詞述語文
3. 名詞述語文
4. “是”による動詞述語文
5. 説明のモダリティ表現
6. 可能のモダリティ表現
7. 意思・推量のモダリティ表現
8. 認定のモダリティ表現
9. 存在文
10. 所有文
11. 所在文
12. 主述述語文
13. 二重目的語文
14. 指示詞
15. 反復疑問文
16. 選択疑問文
17. 疑問詞疑問文
18. 発生のアスペクト表現
19. 完了のアスペクト表現
20. 経験のアスペクト表現
21. 持続のアスペクト表現

22. 進行のアスペクト表現

23. 結果補語
24. 方向補語
25. 可能補語
26. 様態補語
27. 前置詞
28. 連動文
29. 使役文
30. 受動文
31. 処置文

上記の文法項目は、それぞれに豊富な例文を挙げてはいるが、各地の方言を記述するにあたっては、やはり不十分な場合もあった。そこで、調査・記述と同時に、適宜例文を追加・修正する作業を行った。

次に、記述的研究を通して明らかとなったさまざまな現象に対して、「文法化」の観点から分析を行った。

4. 研究成果

本研究は、中国東南地域のさまざまな方言の文法を詳細に記述・分析することによって、北京語のみを研究対象としがちな従来の研究が看過してきた新たな言語事実を発掘し、そこに見られる「文法化」のプロセスを解明することを目的として研究を行った。

本研究を通して得られた果は以下のとおりである。

①台湾桃園県の客家語に関する記述的研究

台湾桃園県楊美地区出身者の協力を得て、『東南方言比較文法研究』（好文出版、2002 年）で提示した文法項目について記述を行い、その文法体系を明らかにした。

客家語は大きく「四縣腔」と「海陸腔」の二系統に分けられるが、今回の調査の被験者は、「四縣腔」を母語とし、日常生活では主に「國語（標準語）」を使用する 30 代の女性である。

近年、中国大陸でも客家語に関する記述的研究がいくつか発表されているが、それらが示すデータとはまったく異なる言語現象が数多く観察された。

②湖南省衡陽市の湘語に関する記述的研究

湖南省衡陽市出身者の協力を得て、『東南方言比較文法研究』（好文出版、2002 年）で提示した文法項目について、用例を収集し、分析を行った。

③受益文と受動文の関連に関する研究

現代中国語にはさまざまな受動標識が存在する。“普通话”と呼ばれる標準語には、主として書面語に用いられる“被”があり、口語には“叫”と“让”がある。そして、授与動詞の“给”もまたその一つに数えられる。

授与動詞と受動標識の関連はなぜ東南地域に集中して観察されるのか。言い換えれば、なぜ北方地域に少ないのか。授与動詞を用いた受動文が東南地域に多いことを指摘する研究は多いが、その理由が突き詰めて議論されたことはないようである。授与と受動の密接な繋がりが観察される東南方言には、何らかの文法的共通点があるのではないかと、という仮説に基づいて、呉語、閩語、客家語、粵語のデータを基に、比較方言文法の観点からこの問題を考察した。

東南方言に共通して観察される現象は、標準語の“让”のような、専ら許容使役を表す使役標識を持たないことである。そのため、許容使役の事態は指示使役や授与使役の標識によって表さなければならない。このことが、授与動詞の文法化を促進することに繋がったと考えられる。

東南方言の授与動詞がモノのやり取りを仲立ちとする授与使役に限定されることなく、許容使役をも表すことが可能になったのは、許容使役を表す“让”が不在であったからだといってよい。そして、許容使役の機能を獲得した結果、授与動詞は受動標識へとさらにその機能を拡張していくことになる。つまり、東南方言では以下のような文法化のプロセスを経て、授与動詞が受動標識の機能を獲得したと考えられる。

(A)授与動詞→(B)授与使役標識→(C)許容使役標識→(D)受動標識

このような文法化のプロセスを仮定することによって、東南方言における授与と受動の繋がりを無理なく説明できると同時に、授与動詞を用いた受動文がなぜ東南方言に多く、北方方言に少ないのかという疑問に対しても、合理的な解答を与えることが可能となった。

この成果は、「東南方言における授与と受動」『南腔北調論集 中国文化の伝統と現代』（東方書店、2007年）として発表した。

④ 東南方言の二重目的語構文に関する研究

東南方言では、次の2つのタイプの二重目的語構文が成立する。

(a) V+IO+DO

(b) V+DO+IO

間接目的語が直接目的語の後ろに来る(b)のタイプの二重目的語構文は、東南方言に多く観察され、北京語をはじめとする北方方言ではほとんど見られない。東南方言において、(b)のタイプの二重目的語文が成立する文法的背景について考察した。

東南方言の記述的研究を進めていく中で、いくつかの地域では、兼語式と呼ばれる次のような連動構造において、与格の前にあらわれるGIVEが省略されるという現象が観察された。

(c) V+DO+(GIVE)+IO+V

そして、この種の省略がおこる地域では、多くの場合、(b)のタイプの二重目的語構文が成立することがわかった。つまり、二つの形式には何らかの構造的な繋がりと考えられる。

この成果は、2007年8月に中国北京大学で開催された「日本語学国際フォーラム」において発表した。

⑤ 受益文に関する日中対照研究

中国語の“给”と日本語の“やる”は、どちらも二重目的語構文を構成する典型的な授与動詞であるが、補助動詞として複合動詞を構成する点においても共通している。

しかし、両者の文法機能を詳しく観察すると、“V给”における“给”が受取手の特定化や事物の到達の顕在化に関与しているのに対して、“Vテヤル”の“ヤル”にはそのような機能は認められなかった。また、“V给”では、“V”そのものに授与の意味が含まれているか否かが当該形式の成立にとってきわめて重要であるのに対して、“Vテヤル”では、記述される状況にモノの授受が関与しているか否かが文の成立を左右していた。このことは、日本語の“ヤル”が具体的な授与の意味を抽象化し、受益関係を示す文法機能を獲得しているのに対して、中国語の“给”は依然として具体的な授与の意味を色濃くとどめていることを示している。言い換えれば、“Vテヤル”における“ヤル”が複合動詞から補助動詞へと一定の文法化を遂げているのに対して、“V给”の“给”は依然として複合動詞のレベルにあることが明らかとなった。

この成果は、2008年10月に中国清华大学において開催された「中日理論言語学国際フォーラム」で発表した。

⑥ 中国東南方言と東南アジア諸語との比較研究

2008年5月にタイ王国チュラロンコン大学で開催された言語学シンポジウムに参加し、中国東南地域の諸方言とタイ語をはじめとする東南アジア諸語との関連について検討した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ①佐々木勲人：「从方言语法的角度谈汉语的使役句与受益句」、『日本现代汉语语法研究论文选』, 北京语言大学出版社, 140-153頁, 2007, 査読無

- ②佐々木勲人：「東南方言における授与と受動」、『南腔北調論集 中国文化の伝統と現代』，東方書店，989-1005 頁，2007，査読有

〔学会発表〕（計2件）

- ①佐々木勲人：授与動詞の日中対照—“V给”と「Vテヤル」の文法化—，日本語学国際フォーラム，中華人民共和国：清華大学，2008年10月12日

- ②佐々木勲人：東南方言の二重目的語構文，中日理論言語学国際フォーラム，中華人民共和国：北京大学，2007年9月2日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 勲人 (SASAKI YOSHIHITO)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：40250998